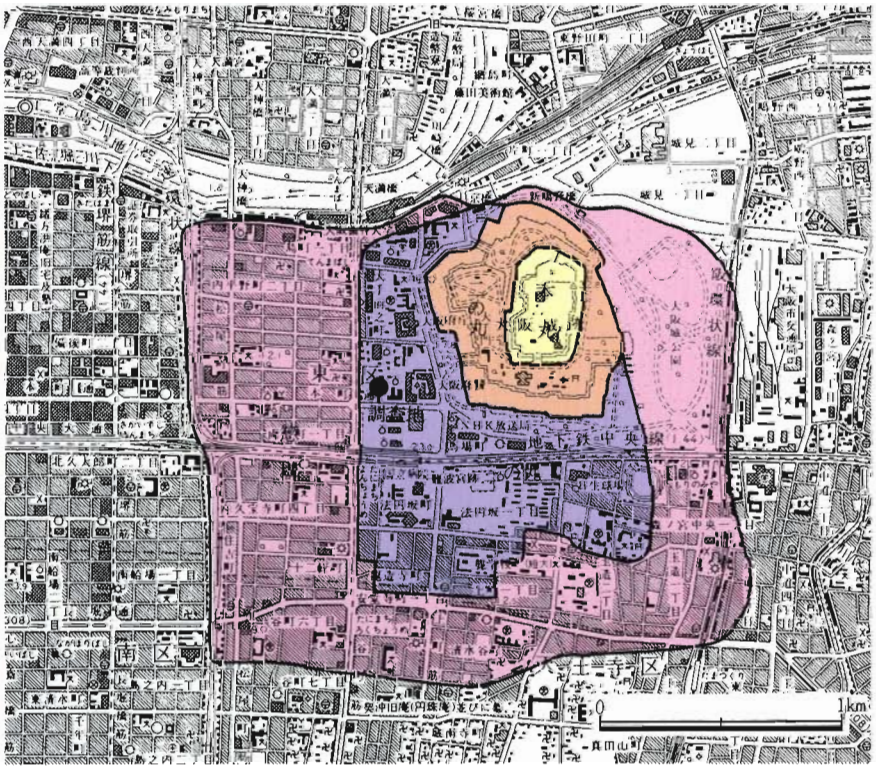
平成７年５月21日

大坂城跡の発掘調査

(財)大阪府文化財調査研究センター



豊臣期大坂城外郭線推定図

西暦	年号	でき事
645		前期難波宮
726		後期難波宮
1496	明応２	本願寺第八世蓮如上人、坊舎を建立
1532	天文１	本山が山科より石山へ移される
1580	天正８	石山本願寺焼き打ち
1583	天正11	賤ヶ岳の合戦、秀吉、摂津を領有　本丸築城開始
1584	天正12	小牧・長久手の戦い　本丸完成
1585	天正13	秀吉、関白となる
1586	天正14	二の丸築造開始　秀吉、太政大臣となり豊臣姓を名乗る
1588	天正16	二の丸完成　刀狩令
1590	天正18	秀吉、天下統一
1594	文禄３	惣構築造開始
1598	慶長３	三の丸築造開始、秀吉死す
1600	慶長５	関が原の合戦
1614	慶長19	大坂冬の陣　大坂城外堀を埋められる
1615	慶長20	大坂夏の陣　大坂城落城　豊臣氏滅ぶ
1620	元和６	幕府による大坂城の修築工事開始
1629	寛永６	大坂城再築工事完成

大坂城周辺の歴史

大坂城周辺の歴史

大坂城のたつ上町台地周辺は、水運などに恵まれた交通の要所として古代より重要な位置を占めてきました。５世紀代には大型の倉庫群が建ち、７世紀から奈良時代には２時期にわたり難波宮が築かれます。平安時代から中世は記録が少ないため詳しいことはわかりませんが、室町時代後期以降は本願寺が建てられ一向宗の中心地として大きな勢力を持ちます。大坂城は、織田信長が本能寺で倒れた後、羽柴秀吉によって築造されはじめます。秀吉は全国統一を進めながら、本丸・二の丸を築き、文禄３年には広大な惣構を造り上げます。秀吉はさらに晩年にいたり惣構の内側に伏見などから大名屋敷を移させた三の丸を築き、ここに堅固な大城郭が完成します。しかしこれらも秀吉の死後、冬の陣・夏の陣で破壊され、徳川氏による盛土と造成によって地中に埋められてしまいます。

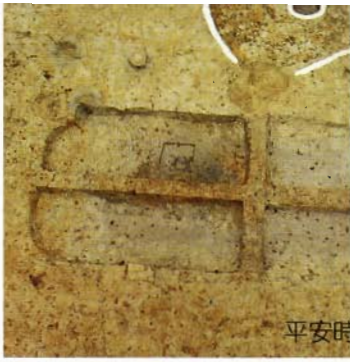
調査成果

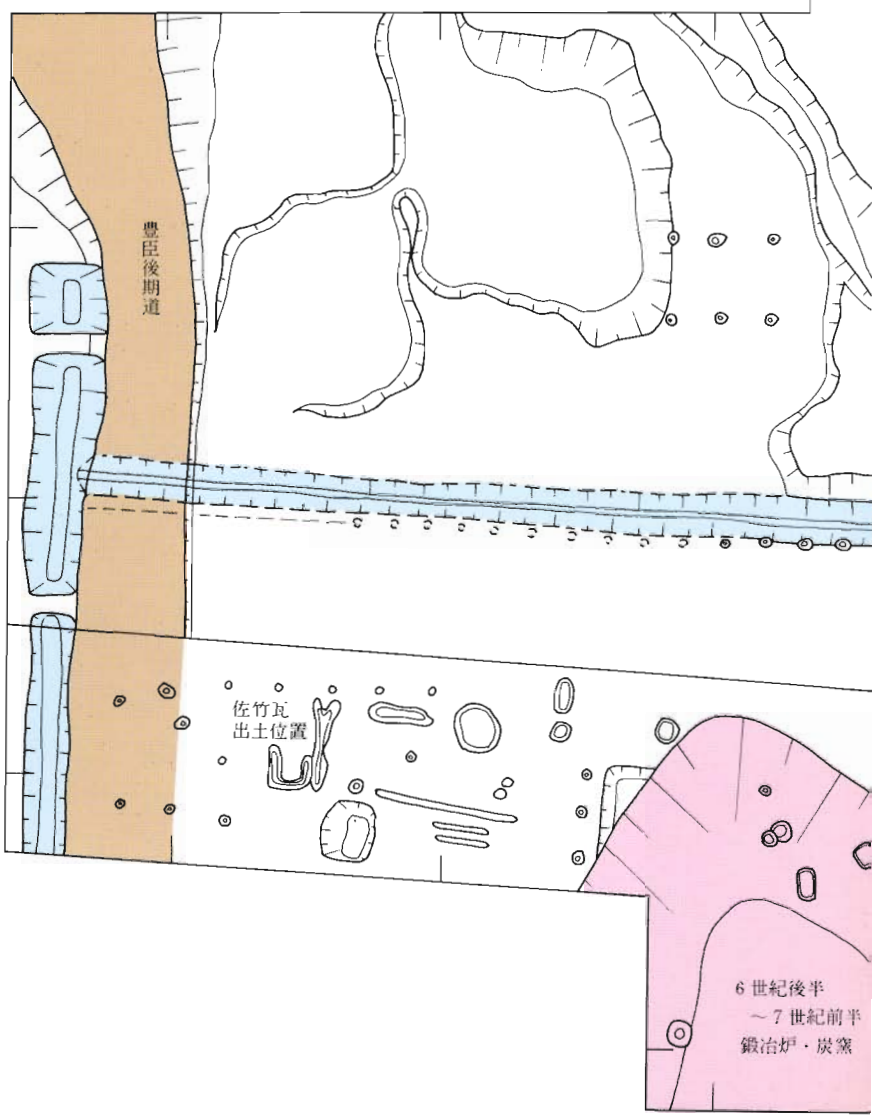
今回の調査では、平成２・４年度の調査で見つかった谷の北斜面を確認し、その谷を埋めた各層から豊臣期・平安時代・７世紀・６世紀の様子を明かにすることができました。

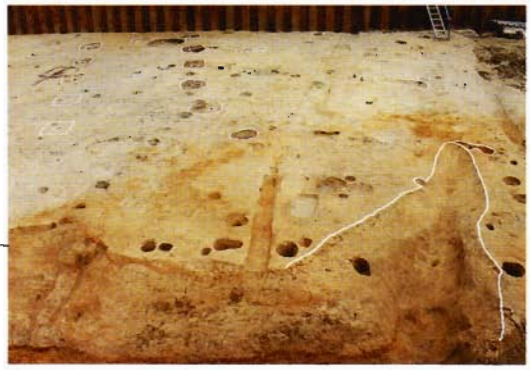
豊臣期にはこの谷地形を利用して、台地部分と谷の下段に武家屋敷が作られていました。台地部分の住人は現在のところわかっていませんが、下段からは「扇に月丸紋」（佐竹氏の家紋）が施されている瓦と大名屋敷の一部が見つかっており、佐竹氏の屋敷と推定されています。今回の調査ではその屋敷の北端を区切ると思われる溝と柵列を発見しました。この溝と柵列は谷斜面を下がった所に平行してはしっています。溝は幅１ｍ深さ0.６ｍで、柵列の柱の間隔は1～1.2ｍです。

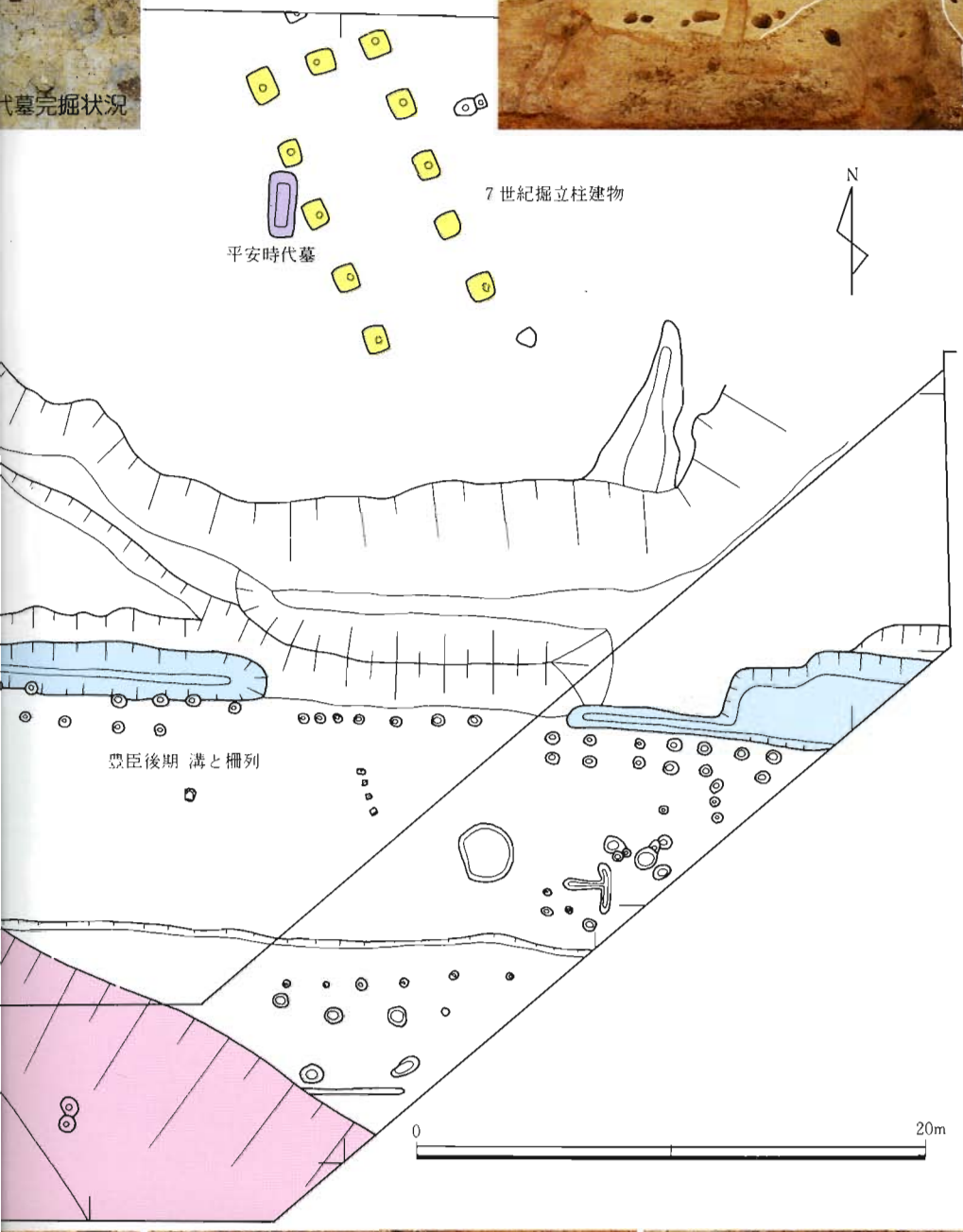
谷は上町台地を横断して東西を軸としてはしるもので、平成２年度の調査において南側の斜面が見つかっています。そのことから考えると谷の南北幅は60ｍ、比高差は５ｍを測る大きなものであることがわかりました。また、調査区の西端では谷を上がる道も見つかりました。

平安時代には台地部分に墓が１基作られていました。上部は後世にかなり削平されており、残っていたのは墓の底近くのみです。墓は長軸を南北に持つ長さ2.5ｍ、幅0.9～1.0ｍ、深さ15cm（残っている深さ）の長方形の掘り方を持ち、この中に長さ1.55ｍ、幅0.75ｍの木棺が納められていました。木棺は









ほとんど残っていませんが一部にその痕跡である木質と四隅に縦材の痕跡が見られます。墓の中から副葬品として29枚の銭貨と数珠玉が出土しました。銭貨は直径9cmの曲物の中に入れられた形で見つかり、判読できた17枚は全て「隆平永寶」です。「隆平永寶」は皇朝十二銭の内の一つで初鋳が796年に行われています。数珠は「T」の字状に孔があけられていることから母珠（おやだま）の部分であることがわかります。大きさは直径1.6cm、孔径0.3～0.4cmあります。

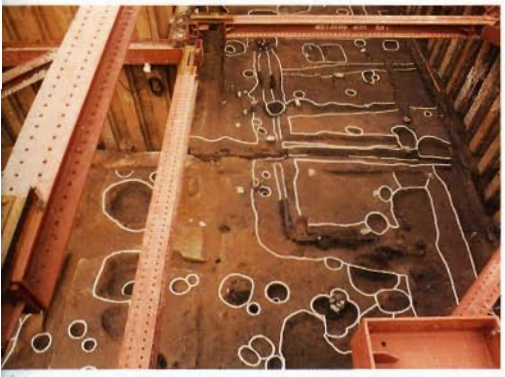
7世紀代においてはやはり台地部分で東西2間、南北4間以上の掘立柱建物跡が1棟見つかりました。柱を立てるための掘り方は一辺0.8～1.0m、深さ0.4m以上の方形のもので、柱は直径15～20cmです。北東から南西に向かって下降する地形に建てられているため南側に存在している柱穴についての残りは悪く、本来は2×5間の建物であったと考えられます。この建物の建てられた時期は柱穴から出土した土器から7世紀前半と思われます。建物の軸は大阪市中央体育館の調査で見つかった同時期の建物の軸が北から約30度西へ振っているのと一致します。

6世紀後半～7世紀前半の鍛冶炉と炭窯

江戸時代初期の畑

豊臣後期の溝と柵列

豊臣後期の道と屋敷跡



豊臣前期の屋敷跡

瓦組の埋桶（豊臣前期）

金唐革（豊臣前期）

金泥かわらけ（豊臣前期）

「福」字瓦（豊臣後期）

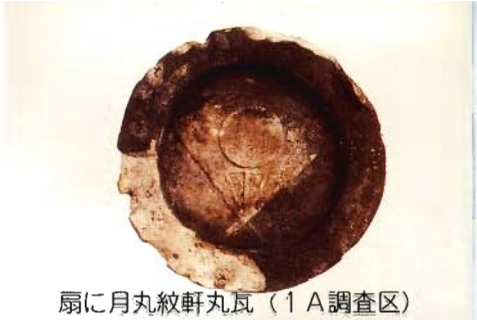
扇に月丸紋軒丸瓦（豊臣後期）

古代鍛冶工房推定復原図（絵・河北洋子）

1A・3A・5B調査区の豊臣後期復原図（推定佐竹屋敷北西隅）

1A・3A・5B調査区の古代地形復原図

府庁地点南北断面模式図



扇に月丸紋軒丸瓦（1A調査区）

豊臣期の長屋群（1A調査区）

古代の土器（5B調査区）

古墳時代の土器（5B調査区）

6世紀後半の炭窯（3A調査区）

古墳時代の鉄斧（3A調査区）

6～7世紀の様子は谷を降りた下の段から見つかりました。調査区の南中央部から鍛冶作業を行った跡が見つかりました。鍛冶作業に関係するものとして鍛冶炉7基と炭窯2基があります。これらは斜面に並んで作られています。鍛冶炉は平面形が円形か長楕円形で、規模は直径が50～80cm、深さが10～15cmです。炭窯は平面形が長方形で、規模は長辺1m、短辺0.8m以上、深さは0.2m以上あります。炉や窯の周囲には鉄滓や羽口の破片など作業に伴う廃棄物が見られました。こうした作業場は今回の調査地点のすぐ南側（3A調査区）でも見つかっており、かなりの規模で操業していたものと考えられます。この操業時期は周囲から出土した土器から考えて古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）と思われます。

今回の調査では古墳時代から豊臣期に至る様々な生活の場を確認しました。その中でも古代に属する多くの遺構が確認できたことは周辺の調査を行うにあたり新たな検討材料として貴重な成果といえます。特に平安時代の墓の存在は、今までこの地域でほとんど確認されていなかった時代の資料であり、今後の調査研究を行うに際して重要な発見

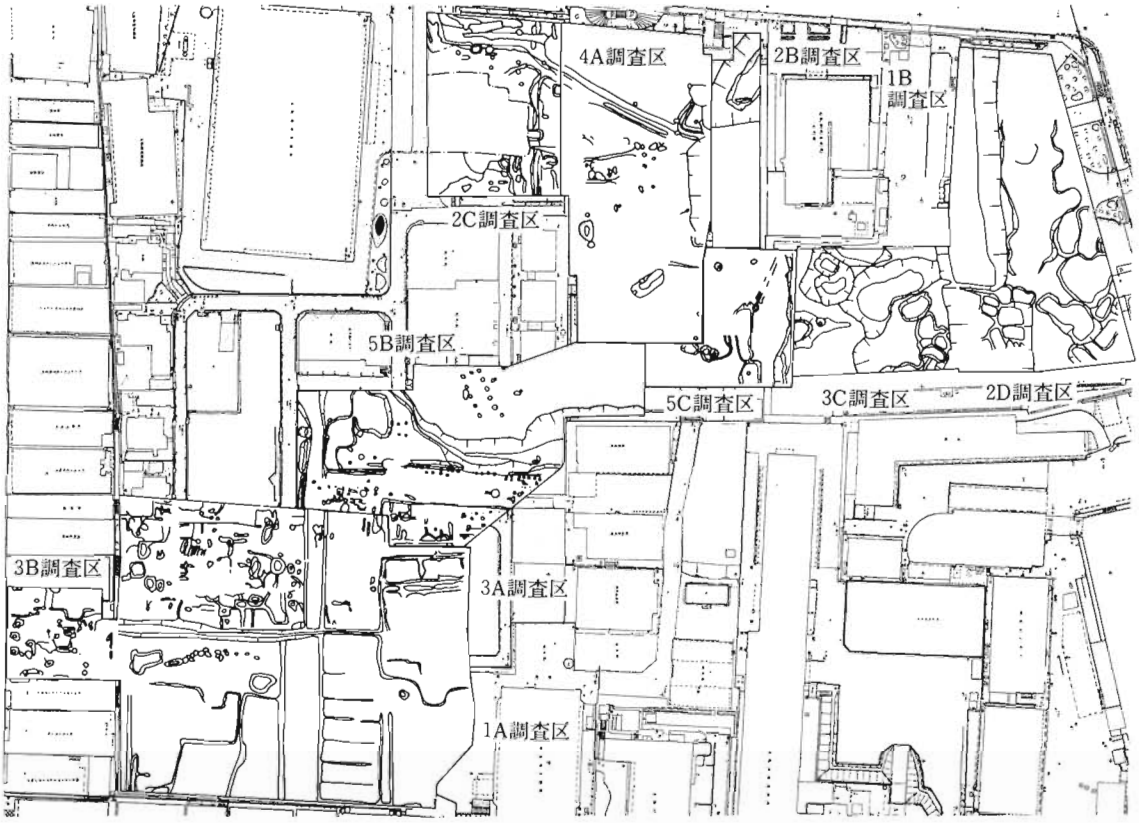
２Ｃ調査区全景

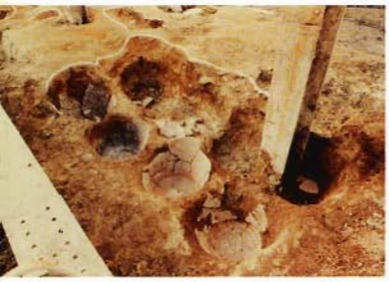
古墳時代の谷と遺物（２Ｂ調査区）

７世紀の新羅緑袖蓋（２Ｂ調査区）

豊臣期の堀（２Ｄ調査区）

「さ竹内」荷札木簡
（３Ａ調査区）





豊臣期の備前焼埋甕（３Ｂ調査区）

豊臣期の礎石建物（３Ａ調査区）

豊臣期の道と町屋（３Ａ調査区）

豊臣期の鋳造土坑（３Ａ調査区）

となりました。また、古墳時代の鍛冶作業場の存在は当時において先進的な技術を持った集団が生活を営んでいたことを窺わせる資料であり、難波宮が造営される直前においても古代難波の重要な場所であったことが推定されます。

また、豊臣期において佐竹屋敷の北限を確認できたことは、今後大名屋敷の規模や構造を考えていく上で大きな成果と言えます。

これまでは５世紀代、難波宮の時代、豊臣期といった時期の研究が進められてきたが、今回はこれまで関心の寄せられることが少なかった時代にスポットを当てることが出来ました。こうした新しい資料は難波宮の造営に関わるメカニズムや中世大坂の復原に対して大きな手掛かりとなります。

これまでの調査成果

今回の調査で府庁用地のうち北東部と南西部の調査区がつながり、全体の様子がわかりつつあります。地形は北部中央の４Ａ調査区が高く、東と南に下がり３Ａ調査区には東西方向の谷がはしります。古代の遺構と遺物はこの高台部から南西と北東の谷にむかってみられました。２Ｂ調査区からは７世紀の新羅の緑釉と古墳時代の土器が出土しています。豊臣期では２Ｄ調査区で絵図に無い南北方向の堀がみつかり、１Ａ・３Ａ・５Ｂ調査区では谷を埋める形で発展していった、大坂城下の成り立ちを豊臣前期から復原することができました。豊臣前期には職人などの町家が並び、後期にはそれらを埋め立てて佐竹氏と推定される大名屋敷がつくられています。陶磁器など当時の様子を知る大量の遺物も出土しています。